opusdei.org

新たなる〈地中海〉 (IV):「話さない で、聖霊の声に耳を 傾けなさい」

聖ホセマリアは、私たちの霊的な生活を照らすこともできるシンプルなアドバイスを通して、聖霊を「発見」しました。

2020/07/10

4.「話さないで、聖霊の声に耳を傾けなさい」

御父のもとに昇る前に、イエスは使 徒たちに予告していました。「わた しは、父が約束されたものをあなた がたに送る。高い所からの力に覆わ れるまでは、都にとどまっていなさ い」(ルカ24・49)。使徒たちはエ ルサレムにとどまり、神が約束され たものを待っていました。実際に は、約束された賜物は、神御自身で ある聖霊でした。その数日後、五旬 祭の日に、使徒たちは聖霊を受け、 神の恵みに満たされることになりま す。「復活の栄光の証人となった使 徒たちは聖霊の力を自らのうちに感 じました。新たな光が彼らの知性と 心を開いたのです」「1」。その日、彼 らは大胆に盲教し始めたので、聖ペ トロの説教を聞いたあと「三千人ほ どしが洗礼を受け、仲間に加わった (使徒言行録2・41) と聖書は伝え ています。

聖霊の賜物は過去の思い出ではなく、今も続いている現実なのだとい

うことを、聖ホセマリアは繰り返し 語っていました。「聖霊降臨の日、 聖ペトロに近づいた最初の人々のように、私たちも洗礼を受けました。 洗礼において父なる神は私たちの生 命を占有され、キリストの御生命に 一致させ、聖霊を送って下さいまれた」[2]。まず洗礼において、それから堅信において、わたしたちは神の 賜物を、三位一体の命を、余すと ろなく受けたのです。

聖霊を発見する

神の賜物としてわたしたちが受けた救いは、ものではなく神なる聖霊というペルソナです。わたしたちちとれたとちないと話全体が、わたしたちのとなって来て宿ってくださる神とのペルソナ的関係にあるのは、それはよく知られている。それはよく知られている真理の一つで、わたしたちの信仰の基本をなすものです。けれどもそれ

は、発見しなければならないことで もあるのです。

「1932年のあいだに、聖ホセマリアの聖霊に対する信心が非常に深まりました」と、聖ホセマリアの著作をよく知る専門家の一人が解説しています[3]。聖霊との親しい付き合いを深めようと数ヶ月にわたって努力したあと、彼は特別な照らしを受け、新たなパノラマを発見しました。そのことは、その日のうちに書いた覚書に記されています。

「諸聖人の八日後――1932年11月8日火曜日、今朝、ほんの一時間ほど前、サンチェス神父さまが『またせつ新たな〈地中海〉』を発見さったとなりなさい。で、で、彼はわたしにこう言させた、『聖霊の友となりなさい。話して、いで軍を傾けなさい。あたして、にでなる祷をして、いで輝くような念祷をしながら、わたしは考えた。幼子のように

牛きるなら、自分が神の子であると 感じることができるし、父なる神の 愛がわたしに伝わるのだと。その前 に、わたしはマリアを通じてイエス のところに行った、友として、兄弟 として、恋人のように夢中になって 愛しているイエスのところに…… 今 までわたしは、聖霊がわたしの霊魂 のうちに宿っておられ、わたしを聖 化してくださるということを知って いた……、しかしわたしは、聖霊の 現存というあの真理を理解してはい なかった。サンチェス神父の言葉は 実に明快だった。わたしは自分のう ちに愛である方を感じる、そして、 その方と親しく付き合いたい、その 友となりたい、打ち明け話の相手と なりたいと思う、その仕事を助けた いと思う、磨き上げ、引き抜き、燃 え上がらせるその仕事を…… けれど も、わたしにはそうすることはでき ないだろう、あの方がわたしにその ための力をくださるのだ、あの方が すべてをしてくださるだろう、もし

覚書の中で、聖ホセマリアは神に導かれてたどった霊的道程をこう発 めている――神との親子関係よの発 見、マリアを黙想すること、キリアを黙想すること、キリアを黙想すること、キリスのもとに行くこで、でしてるいっうちに現存のうちに現存のうちにも後に書ととでも関するまで、心が来るのです。「そこで、心は、聖 三位の各ペルソナを区別して、別々に礼拝する必要に駆られる。(…) 聖父ちちと聖子こと聖霊との交わりを楽しみ、活ける力をお与えになる 慰め主の御働きかけに従います。戴いただくねうちのない私たちに、超自然徳や賜をお与えになる慰め主に従うのです」[5]。

聖霊がキリスト者の心に宿るという ことは、聖ホセマリアもすでに知っ てはいましたが、それが生きた現実 であるということ、深い体験として 生きられるものであるということ は、まだ理解せずにいました。霊的 指導者の助言のおかげで、新たな視 界が彼の目の前に開かれたのです、 ただ理解しただけでなく、何よりも 実際に生きた体験として――「わた しは自分のうちに愛である方を感じ る」と。この驚くべき体験によっ て、彼は、その愛に応えたいという 燃えるような熱意を抱いたのです、 「その方と親しく付き合いたい、そ

の友となりたい、打ち明け話の相手となりたいと思う、その仕事を助けたいと思う、啓き上げ、引き抜き、燃え上がらせるその仕事を……」。 そして、自分にはできないだろうと恐れるのではなく、神におまかせするなら、神がすべてをしてくださると確信したのでした。

神の賜物を受け入れる

聖ホセマリアの前に姿を現したこの 新たなる〈地中海〉において、最初 に注意を引かれることは、神が主意ということです。その数 であるということですとが、「の をに彼が書き記したことが、「 道』の57番となりますーー、な がしたると付き合いない。 〈知られざる偉大な御方である る聖霊、彼こそ聖化する御方である」 [6]。わたしたちの聖性は神のちる を聖化してくださるその神がしばし ば〈知られざる偉大な御方〉になっておられるとしても。

現代のように、人間の行為やわたし たちの努力の成果が強調される世界 では、わたしたちが神から受ける 「救い」は完全に無償の賜物である ということが、必ずしも理解されて いるわけではありません。聖パウロ はこう言っています、「あなたがた は、恵みにより、信仰によって救わ れました」(エフェソ2・8)。もち ろん、努力することは大事ですし、 どういう生き方をするかということ も重要な問題です。けれども、わた したちのすることはすべて、次の確 信に基づいているのです――「キリ スト教は恵みです。神の驚くべき贈 り物です。この神は、世界と人間を 創造しただけで満足せず、被造物の レベルにまで降りてきてくださった のです」[7]。これは、わたしたち一 人ひとりが個人的に発見すべきこと でもあります。教皇フランシスコが

好んで繰り返し語っているように、こう認めるべきでしょう、「私にとって神はつねに、『先手を打たれる』存在になっています。人は神を探し求めますが、先に探し求めるのは神のほう。人は神との出会いを願いますが、先に願うのは神のほうです」[8]。

この発見から生まれるのが、「いの ちに関するキリスト教的ビジョンの 本質的な原理を尊重するというこ と、すなわち恵みを何よりも大事に することです」「9」。教会を新たな千 年紀へと導くための準備として語ら れた聖ヨハネ・パウロ二世のこの言 葉は、いまでも今日的な意義を保っ ています。とくに教皇は、わたした ちの霊的生活や使徒職活動の中に忍 び込むかもしれない誘惑――「成果 は自分たちの作業能力や計画能力に よると考える | [10]誘惑——に警戒 するよう注意しています。この誘惑 に陥ると、わたしたちの内的生活が

思うように深まらないのは努力が足 りなかいからだとか、使徒職が期待 したほどの成果があげられないのは 意欲が十分ではないからだとか、考 えてしまうかもしれません。確かに それは原因の一つであるのかもしれ ませんが、それがすべてではありま せん。わたしたちキリスト者は、神 がすべてをなさるということを知っ ています。「使徒職活動の発展は人 間の力によるのではありません、聖 霊の息吹によるのです」[11]。ここ には別のものの見方があります、わ たしたちの人生の価値はわたしたち が何をしたかにあるのではないし、 またその価値はわたしたちがほとん ど何もできなかったり失敗したこと によって失われるのでもない…… わ たしたちが、わたしたちのうちに住 んでくださったあの神の方を向いて いる限り、そうなのです。「聖霊に 従って生きるとは、信仰・希望・愛 をもって生きることに他なりませ ん。言いかえれば、神が私たちを御

自分の所有物とされ、私たちの心を 根本的に変えて神に相応しくされる におまかせすることなのです」 [12]。キリスト者としての生活の 一一父なる神がわたしたちにお委った「善い業を行う」(エストインでは、「日々神との父子関係に支えずいれた希望ある委託のうちに過ごくだされた希望あるを表記のうちに過ごだされたの場物を、感謝をもって受け入れることにあるのです。

「聖霊との愛を込めた従順で親しい 付き合い!

神の賜物を受けるということは、聖 霊というペルソナを受け入れることで、「聖霊の友となりなさい。話さ ないで、その声に耳を傾けなさい というサンチェス神父の助言もそる から来ています。わたしたちをある 人と結びつける絆は友情です。そ て友情は、対話によって深まりま す。だからこそ、自分の心のうちに神がペルソナとして現存されることを発見したとき、聖ホセマリアは

「聖霊との、友情と愛を込めた従順で親しい付き合いを、できる限り絶え間なく続けること」という具体的な決心をしたのです。まさにそれは、聖霊の声に耳を傾けるために、わたしたちにもできることなのです。

この道はすべてのキリスト者が歩む ことができる道です。聖霊の働きか けに絶えず心を開き、その勧めに耳 を傾け、わたしたちを「真理」へと 導いて(ヨハネ16・13) いただくの です。イエスは使徒たちに約束され ました、「聖霊が、あなたがたにす べてのことを教え、わたしが話した ことをことごとく思い起こさせてく ださる | (ヨハネ14・26)。聖霊 は、わたしたちが神の御計画に従っ て生きられるよう導いてくださる方 です、なぜなら聖霊は「これから起

こることをあなたがたに告げる」 (ヨハネ16・13) 方だからです。

初代キリスト者たちはそのことをよ く理解していましたし、しかもその ように生きていました。「使徒行録 の中で、初代キリスト者共同体の生 活と業とを導きはげます聖霊とその 働きについてふれない頁はほとんど ありません」[14]。実際に、「神の 霊によって導かれる者は皆、神の子 なのです」(ローマ8・14)。聖霊 の導きに身を委ねつつ、「耳を傾け るという困難な訓練」[15]に日々は げむことです。聖霊と親しく付き合 うということは、その声に耳を傾け ること、「日常生活のさまざまな出 来事を通じて、その喜びや苦しみを 通じて、身近な人々を通じて、真 理・幸福・善・美を渇望する良心の 声を通じてあなたに語りかける| [16]聖霊の声に耳を傾けることで す。

その意味で、最近出版されたベネ ディクト十六世との対話本の一節に は興味深いものがあります。ジャー ナリストが、ひどく孤独に感じるよ うなときはありましたか、と質問し たのに対して、教皇は「ええ、で も、主と強く結びついていると感じ ていますから、まったく孤独なとき は決してありませんね」と答えてか ら、すぐにこう続けています、「た だ、わかっているのです、これをし ているのはわたしではないのだと。 わたし一人ではできません。主がい つもいてくださるのです。わたしは ただ耳を傾け、主に対して完全に心 を開けばよいのです | [17]。神と人 牛を共にし、神との友情に牛きると いう生き方は、昔と変わらず、今日 でもなお魅力的です。でも、と ジャーナリストは尋ねます、「どう したらそんなふうに耳を傾けられる のでしょうか、そんなふうに神に対 して心を開けるのでしょうかし。名 誉教皇は笑っていますが、ジャーナ

リストはしつこく尋ねます「どうよくできるのですか」。答えてきるのですがに答えたった。答えます、「そうですね、主に乞がが必を集ったの助けるのからです!一一そと黙ってもままがでもなったまとがでもないでもないでもでもいっまくいでもない。でもないでもでもいっまくいきましたいうまくにもいうまくにもいうまくにもいうまくにもいうまくにもいうまくにもいうまくにもいうまくにもいうまくにもいうまない。

その声を聞き分けることを学ぶ

わたしたちの祈りの生活において も、たぶん意識して求めているわけ ではないのでしょうが、少しばかり 特別な体験を期待することは神るとしている、神はわたしの言葉を聞 している、神はわたしの言葉を聞ってくださしに語りかけてく保証 いるのだ――ということを保証しけれ とれるような、特別な体験を。 といる、霊的生活はもっと日常的な形 で展開するのです。特別な恵みを受けることよりは、むしろ「私たちの周囲で、また私たちの心の中で、聖霊がお勧めになることに対して敏感になること」[19]が大切なのです。

「神の霊によって導かれる者は皆、 神の子なのです| (ローマ8・ 14)。普通、聖霊の働きは、わたし たちに具体的な指示を与えるという よりも、わたしたちを照らし方向を 示唆するような形で示されるもので す。聖霊は、実にさまざまなやり方 で、一人ひとりの状況に応じて、わ たしたちの生活の大きな事件や小さ な事件に光を与えて下さるのです。 そのようにして、さまざまな事柄が 新たな光に照らされることによっ て、それまでは不鮮明で不確かだっ たことの意味が、はっきりと見える ようになるのです。

どのようにしてわたしたちはこの光を受けるのでしょう? 数え切れない

ほどさまざまな仕方でです。聖書 を、聖人たちの著作を、霊的書物を 読むことによって、思いがけない状 況に直面して、友人との会話を通じ て、ある知らせを受けることによっ て……要するに、聖霊がわたしたち に何かを示唆してくださるときは、 数限りなくあるのです。ところで聖 霊は、わたしたちの理解力と自由に 応じて、その示唆の仕方を変えるの です。ですから、聖霊からの光を祈 りのうちに受け入れ、日々ゆっくり と黙想することを学ぶ必要がありま す。そして祈りのうちに主に尋ねる のです、「わたしの心をとらえてい るこの問題、わたしに起こったこの ことを通じて、あなたは何をわたし に伝えようとなさっているのです か? わたしがどう生きることをお望 みなのですか? | と。

このように辛抱強く耳を傾けること によって、わたしたちの心に聖霊の 声が聞こえてくるようになるとよい

のですが、そこには別の声も混じっ ていることに注意すべきです、私た ちのエゴイズムや欲望あるいは悪魔 の誘惑の声が…… どうしたらそれが 聖霊の声だと見分けられるのでしょ う? このことに関しては、他の多く の問題同様に、疑う余地のない証拠 は存在しません。しかし、聖霊の現 存を識別するための助けとなるよう なしるしはいくつかあります。第一 に、神は御自分に反するようなこと は言わないということを、しっかり 心に刻んでおくことです。神は、聖 書に書かれ教会が教えるイエス・キ リストの教えに反することをわたし たちに求めたりはしませんし、わた したちの召し出しに反するようなこ とを示唆することもありません。第 二に、その示唆が何をもたらすの か、注意すべきです。木の善し悪し は、その結ぶ実で見分けることがで きます(マタイ7・16-20)。聖パウ 口が書いているように、「霊の結ぶ 実は愛であり、喜び、平和、寛容、

親切、善意、誠実、柔和、節制です」(ガラテア5・22-23)。教会の 霊的伝統が常に教えてきたことは、

「神の霊は必ず心に平和をもたらす が、悪魔は必ず不安をもたらす| [20]ということです。一日のあいだ に、いくつも良い考えを思いついた りします――人の手伝いや世話をす ること、人を赦すこと、など。たい ていの場合、わたしたちが良い考え を思いついたというだけではなく、 聖霊がわたしたちの心に働きかけて いるのです。聖霊のこのような示唆 に従って行動するなら、わたしたち の心は本物のgaudium cum pace――平和に満ちた喜び――で いっぱいになることでしょう。

ともあれ、聖霊に対する従順は、霊 的指導を受けながらゆっくりと育て ていくべきものです。聖ホセマリア の目の前に新たな視野が開かれたの は、まさに霊的指導者の言葉がきっ かけだったことを思えば、その重要

さも理解できるでしょう。聖霊の声 に耳を傾けなさいという勧めは、サ ンチェス神父が霊的指導者としての 自分の使命――聖霊がその霊魂を 徐々に導き、「磨き上げ、引き抜 き、燃え上がらせる…… | ようにす るという使命――を自覚していたこ とも示しています。それが、霊的生 活において人に寄り添う者の務め ――その人が自分自身を知り、聖霊 が求めていることをしっかりと識別 できるようにするという務め――な のです。そうやって、一人ひとりが 少しずつ、自分の身に起きたことや 周囲の世界で起きていることの中に 神を見ることを学んでゆくのです。

聖霊の息吹を受け、神の愛に錨を降 ろし

主の昇天と聖霊降臨のとき以来、わたしたちは宣教の時代を生きています。キリストはわたしたちに、全世界に救いをもたらす使命を委ねられ

ました。教皇フランシスコは「神が信じる者たちに呼び起こそうという原動力」[21]にいる『行け』という原動力」[21]について繰り返し語りながら、神はわたちに、その務めと共に、も与れたものだと教えています。実際に、その「原動力」は、「一種の戦略ではなく、造られたものでよなである聖霊ご自身の力なのです」[22]。

キリスト者の希望に関する連続講話の中で、教皇フランシスメージは、教用のたがよく使っていたイタをある。では、聖霊の博していから、四さをがら、切ったがはが、一方のははが、一方のとれている。のでは、一方の側になったがした。では、一方のものでは、できるものでは、できるものである。

希望はまさに帆のようなものです。 聖霊の風を集め、状況に応じて、沖 や岸に向かって、船を押しやる原動 力に変えてくれます」[23]。

神の愛に深く錨を降ろして生きるな ら、わたしたちは安心が得られま す。聖霊のうながしに気を配りつつ 生きるなら、わたしたちは神の力を 得て、神が示す方向に向かって進む ことができます、「地上の事物を頼 りにせず、聖霊の御声とささやきに 耳を傾けつつ、舞い上がる」[24]の です。この二つは、神との一致から 生まれます。それで「教会は祈りと いう呼吸を緊急に必要として| [25] いるのです。ここ数代の教皇様たち は、そのことを絶えず指摘してきま した。同じ聖霊のうながしによっ て、キリストがわたしたちに委ねら れた使命を成し遂げたいと思うな ら、道は一つしかありません、祈り によって、聖霊との信頼に満ちた親 しい付き合いによってです。そう

やって、わたしたちの心におられる神の生きた現存という、新たなる〈地中海〉を発見するのです。そして、「光と火と激しい風であり(…)心に火をつけ、愛の炎を燃え立たせてくださる」[26]聖霊に導かれながら、沖へとこぎ出すのです。

- [1] 『知識の香』127 [前掲邦訳、 289ページ]。
- [2] 同、128 [同、291-292ペー ジ]。
- [3] Cfr. P. Rodríguez, Camino. Edición crítico-histórica, comentario al n. 57.
- [4] San Josemaría, Apuntes íntimos, n. 864, en P. Rodríguez, Camino. Edición crítico-histórica, comentario al n. 57, p. 270. Se

remite allí a un estudio de J.L. Illanes, "Trato con el Espíritu Santo y dinamismo de la experiencia espiritual. Consideraciones a partir de un texto del Beato Josemaría Escrivá", en P. Rodríguez et al. El Espíritu Santo y la Iglesia: XIX Simposio Internacional de Teología de la Universidad de Navarra, Servicio de Publicaciones de la Universidad de Navarra, 1999, 467-479 (disponible aquí).

https://dadun.unav.edu/handle/ 10171/5827

[5] 『神の朋友』306[前掲邦訳、 384-385ページ]。

[6] Cf. P. Rodriguez, Chemin, édition historico-critique, commentaire du n° 57. L'auteur fixe la date de rédaction de ce point au 22 novembre 1932.

[7] 教皇ヨハネ・パウロ二世、使徒的書簡『新千年期の初めに』2001年1月6日、4 [貝原敬子訳、カトリック中央協議会、2001年、7ページ。なお、原文に合わせて一部を訳し直しました]。

[8] セルヒオ・ルビン/フランチェスカ・アンブロジェッティ『教皇フランシスコとの対話――みずからの言葉で語る生活と意見』 [八重樫克彦、八重樫由貴子訳、新教出版社、2014年、56ページ]。

[9] ヨハネ・パウロ二世『新千年期の初めに』38 [前掲邦訳、53ページ]。

[10] 同上 [なお、原文の文脈に合わせて訳文を微調整した]。

<u>[11]</u> 『エスクリバー師との対話』 40。

- [12] 『知識の香』134 [前掲邦訳、 302ページ]。
- <u>[13]</u> フェルナンド・オカリス「司牧 書簡」8。
- [14] 『知識の香』127 [前掲邦訳、 290ページ。なお、原文に合わせて 一部を訳し直した]。
- [15] ヨハネ・パウロ二世、演説、 2004年6月5日。
- [16] 同上。
- [17] Benedicto XVI, Últimas conversaciones con Peter Seewald, Mensajero, Bilbao, 2016, 284.
- [18] 同上。
- [19] 『知識の香』130 [前掲邦訳、 294ページ。なお、原文の文脈に合 わせて一部を訳し直した]。

[20] ジャック・フィリップ『聖霊の息吹のまま』 [渡辺美紀子訳、ドン・ボスコ社、2000年、84ページ。ただし、本書の著者ルカス・ブックは、フィリップの原テキストの一部を省略した形で引用しているので、それに合わせて訳し直した]。なお、この問題については『聖霊の息吹のまま』第3部を参照。

[21] 教皇フランシスコ、使徒的勧告 『福音の喜び』20 [前掲邦訳、28 ページ]。

[22] フェルナンド・オカリス「司牧 書簡 | 9。

[23] 教皇フランシスコ、一般謁見講話、2017年5月31日[『キリスト者の希望――教皇講話集』カトリック中央協議会事務局訳、カトリック中央協議会、ペトロ文庫、2018年、139ページ]。

[24] 『鍛』994 [前掲邦訳、231ページ]。

[25] 教皇フランシスコ『福音の喜 び』262 [前掲邦訳、219ページ]。

[26] 『神の朋友』244[前掲邦訳、 322ページ。なお、文脈に合わせて 訳し直した]。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/aratanaru-chichukai-iv/(2025/11/22)